# フランスの動物園における動物展示

梶浦　文夫
倉敷芸術科学大学生命科学部

（2010年10月1日　受理）

## 1．はじめに

最近では旭山動物園の行動展示やサンディエゴ動物園、よこはまズーラシア動物園の生態展示など、動物園・水族館における動物展示の話題が多く語られている[3)4)5)]。動物展示は飼育動物が野生のときと同様に豊かな生活をすることができるという動物福祉の観点からも、また来園者がより深く野生動物のことを知ることができるようにという社会教育の観点からも重要なテーマである。このため、世界中の動物園において日々新しい動物展示の試みが行われている。

著者は、これまで日本国内の動物園を中心に動物展示の工夫や方法について調査を行ってきた。まだまだ、国内の動物園の調査も十分とは言えないが、今年度からは海外の動物園の動物展示の調査を始めることにした。それぞれの国には動物園の歴史の違い、動物に対する考え方の違いがあり、それらが動物の展示に関しても影響を与えているはずである。動物園の歴史はヨーロッパから始まったと言われている[1)2)]。そこで、最初の調査地をヨーロッパとした。

以上のような理由から、著者は2010年5月18日から5月25日までの8日間、フランスの動物園・水族館における動物展示について調査した。本研究では、動物園の歴史上重要なパリ植物園付属動物園と新しい試みのリヨン動物園における動物展示について報告する。

## 2．世界の中のフランスの動物園

動物園の歴史の中で、世界初の動物園だと言われている動物園がいくつかある。それらの中で、市民に公開された現在のような形の動物園の始まりは、フランス革命直後の1793年に開設されたパリ市の植物園（Le Jardins des Plantes de Paris）付属動物園であると言われている。ちなみに世界最初の水族館もフランスのボルドー水族館であると言われている。このように、動物園の歴史の上でフランスの動物園・水族館は非常に重要な位置を占めている。

今回調査したのは、パリ植物園付属動物園、リヨン動物園、パリ市郊外のトワリー野生動物園（日本のサファリパーク）、パリ市水族館（CINEAQUA）、パリ市熱帯水族館だが、パリ市にはこの他にもヴァンセーヌ動物園（PZP）がある。ただし、この動物園は2008

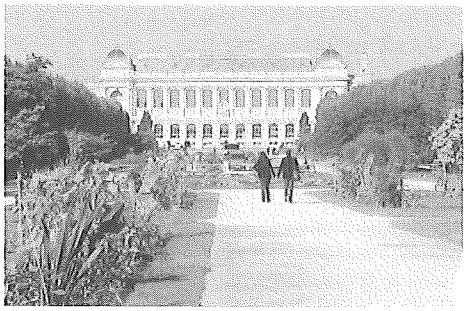

図１　パリ植物園

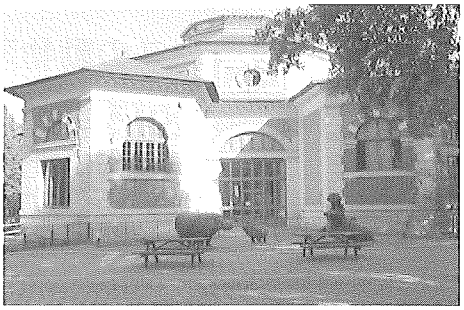

図２　フランス革命時代の建物

年から2014年まで大改造工事のため閉園中のため、今回の調査からは外した。

世界の動物園の歴史上重要なのは、パリ市東南部、セーヌ川沿いにある植物園付属動物園（Le Menagerie du Jardins des Plantes）である。この動物園の始まりはフランス革命である。革命によって王政が廃止され、王立の機関はすべて国立（National）の機関となった。当時ベルサイユ宮殿で王のコレクションとして飼育されていた動物たちを引き取ることになったのがパリの自然科学研究所であり、そこに所属する植物園と同様に動物園（Menagerie）として一般公開することになったのが1793年である[2)]。

図１に現在のパリ市植物園の写真を、また図２に付属動物園内の古い建物の写真を示す。図２の建物はフランス革命直後に建てられたものであり、この動物園内には、この建物同様に由緒ある建物が多く残っている。言わば、この動物園全体が歴史的遺産となっている。したがって、獣舎の改築・改装を伴うような新しい動物展示の試みは難しいようである。絶滅危惧種の保護および繁殖には積極的に取り組んでいる。本研究では、主にリヨン動物園の動物展示について論ずる。

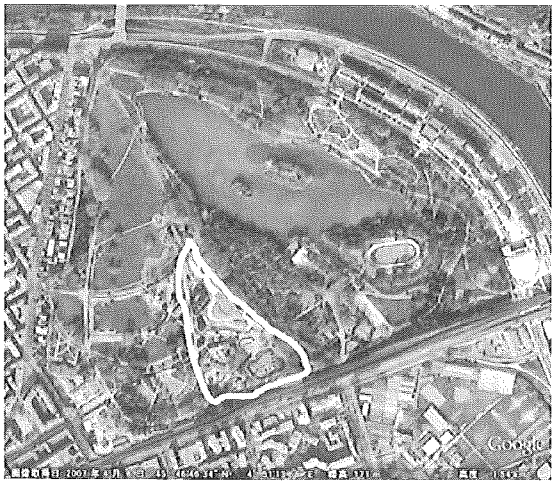


図３　Parc de la Tête d'Or

## ３．リヨン動物園における動物展示

リヨン動物園（Le jardin zoologique du parc de la Tête d'Or）は、テットドル公園（Parc de la Tête d'Or）という公園の中にある[6)]。この公園は、リヨン中央駅（la gare de Lyon part dieu）から徒歩圏内にあり、大都市中心部の公園としては世界最大（敷地面積117ha）である。図３にテットドル公園の航空写真（Google Earth より）を示す。図中の白い線で囲まれた部分がリヨン動物園である。動物園エリアは6haほどで、それほど広

くはない（上野動物園は16ha）。

リヨン動物園の大きな特徴は入園料が無料だという点である。来園者は市の中心部にある公園に来て家族で憩うことができ、好きな時に好きなだけ動物を観察することができる。有料の動物園の場合、どうしても料金を支払ったのだからという理由で園内すべてを見て回らなければならない気分になる。ところが、リヨン動物園の場合は、毎回少しずつ観察することができる。逆に言えば1か所をじっくりと観察することができる。

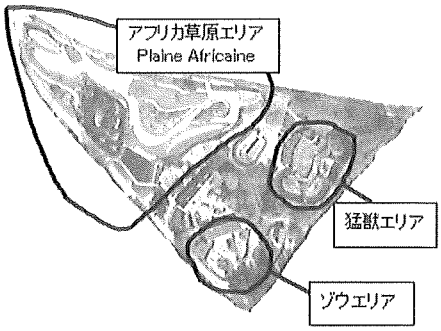


図4　リヨン動物園

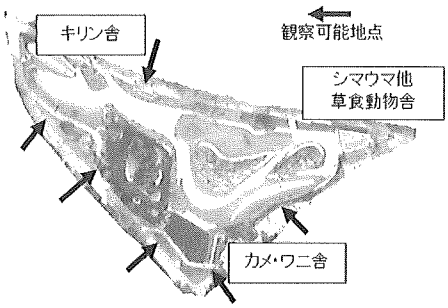


図5　アフリカ草原エリア

図4にリヨン動物園の全景（Google Earthの画像に著者が作図）を示す。図の左上の部分は、アフリカの草原を再現したエリアでキリンやシマウマなどの草食動物を複合飼育している。また、右側にライオンやクマなどの猛獣エリア、右下にゾウのエリアがある。リヨン動物園は2006年にリニューアルしたばかりである。そのため、動物展示に関しては、新しい考え方を盛り込んでいる。それは、（1）動物福祉を考えた展示、（2）動物の種に応じた人と動物の間の適切な仕切り、大都市の中心部にありながら（3）緑豊かな園内設計などである。

### 3．1　動物福祉を考えた展示

図5にアフリカの草原エリアを示す。このエリアは約3haの広さで、アフリカのサバンナを再現している。このエリアの特徴は、草食動物ができるだけストレスなく過ごせるように、来園者が観察できる地点を限定している点である。図5の矢印が観察可能な地点を表わしている。特に図5の上部には観察地点が1か所しかなく、それ以外は背の高い木を植えて、草食動物が安心して過ごせるスペースを確保している。図5の左下から撮影した写真を図6に示す。この写真のように、草食動物は来園者からは相当の距離を隔てた位置におり、その背後の背

図6　背後の高木のゾーン

の高い木のゾーンによって守られている。

### ３．２　人と動物との適切な仕切り

人と動物を分ける仕切りとして使用されているのは、モート（堀）、ガラス、金網である。これらのうち最も多いのはモートである。このモートも動物の種類に応じて様々な工夫がなされている。

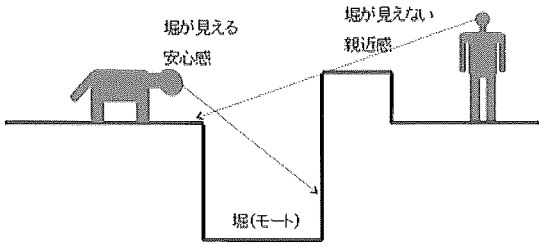


図７　低いフェンスで堀を隠す

例えば、シカの場合の工夫を図７に示す。人のいる歩道の端に低い石積みのフェンスを設けていて、フェンスがモートを隠すように高さが調節されている。人の方から見ると、低いフェンスのすぐ向こうにシカがいるように見える。一方、シカの側からはモートが見えて、シカに安心感を与えている。図８に歩道側からシカのエリアを見た写真を、また、図９にシカの側から人の方を見たときの写真を示す。これらの写真を見ると、歩道の側からは、まるでシカが低いフェンスのすぐ向こうにいるように見えて、心理的な距離は極めて近い。逆にシカの側から見れば、モートが自分たちを守ってくれているように見えて安心感があると思われる。

図８　歩道からシカを見ると

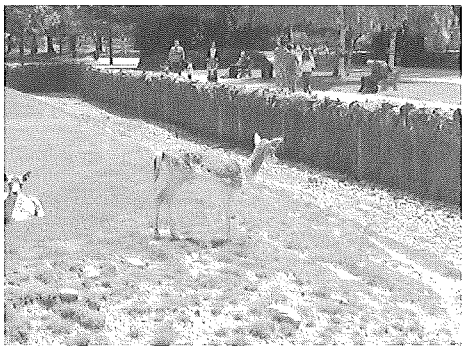

図９　シカの側から人を見ると

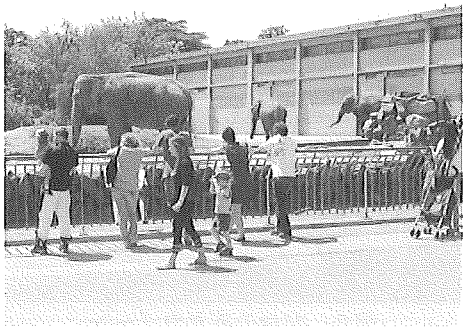

図１０　ゾウは比較的身近に

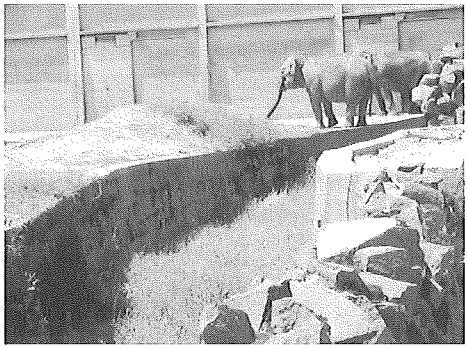

図１１　ゾウエリアのモート（堀）

ゾウのエリアも石積みフェンスでモートを隠すような設計になっている。しかし、その手前に金属製のフェンスがあるためか、シカのエリアより心理的な距離が遠い。図10に、歩道側からゾウのエリアを見た写真を示す。また、図11にかなり広くて深いモートの写真を示す。

これらに対してライオンのエリアは、逆に人の側に安心感を与えるように、しっかりとモートが見えるような設計になっている。図12にライオンのエリアの写真を示す。どのエリアも十分なモートで仕切られているのだと思われるが、人にとって身近に感じたい動物か、十分離れていて安心したい動物かによって、石積みの低いフェンスをうまく使って心理的な距離を調節している。

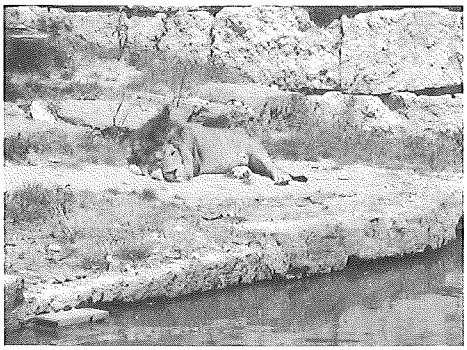
図12　猛獣は厳重な堀で仕切る

モート以外の仕切りとして、ワニやカメなどの爬虫類はガラスで仕切っていた。図13にワニ舎の写真を示す。ガラスによって、安全に、それでいて至近距離から観察することができるというメリットがある。

また、サルや鳥などは金網のケージを用いた展示が行われていた（図14）。

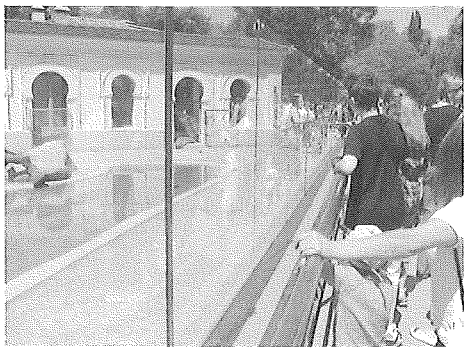
図13　ワニはガラス越しに近くから観察

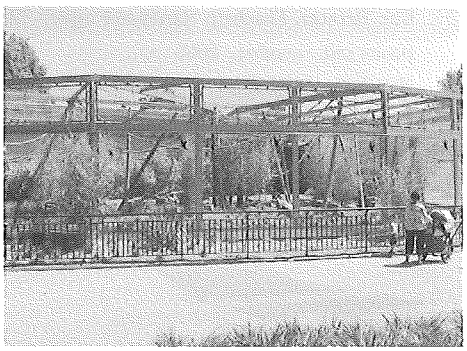
図14　テナガザルは金網の仕切りで

### 3.3　緑豊かな園内

リヨン動物園は入園料が無料であるため、園内外の境があいまいである。その上、動物園の外側には広大な公園が広がっているため、非常に緑豊かである。

一般にパリ市などの公園は歴史があり、園内に彫刻作品など文化財が多いので、子供たちがボール遊びなどをするような雰囲

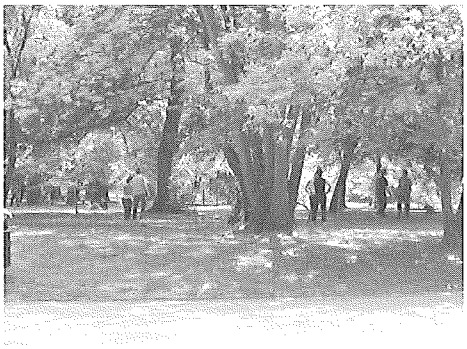
図15　緑豊かな園内

気ではない。それらと比べると、このリヨンのテットドル公園は同様に歴史があるにもかかわらず、家族連れが多かった。著者が訪れたのが土曜日だったこともあるが多くの家族連れが芝生でランチやボール遊びを楽しんでいた。図15に動物園内の緑豊かな景色の写真を示す。

## 4．まとめ

海外の動物園における動物展示の調査をフランスのパリ市、リヨン市の動物園で行った。パリ市の植物園付属動物園は歴史的価値が高く、絶滅危惧種の保存にも力を入れていた。リヨン動物園は、広い公園の中にある無料の動物園として、市民に愛され、動物展示に関してもよく工夫されていた。また、動物福祉を十分に考慮した設計をしており、見習うべき点が多い。

今後の調査の予定として2011年度は北米西海岸のサンディエゴ動物園、ロサンジェルス動物園を考えている。日本国内の動物園の調査と並行して今後も調査を継続していきたい。

### 文献

1） 小宮輝之，“物語上野動物園の歴史”，中央公論社，東京，2010.
2） Eric Baratay, Elisabeth Hardouin-Fugier, “A History of Zoological Gardens in the West”, Reaktion Books Ltd, London, 2002.
3） 渡辺守雄，“動物園というメディア”，青弓社，東京，2000.
4） 奥宮誠次，“世界の動物園”，ランダムハウス講談社，東京，2008.
5） 久米由美，“今、世界中で動物園がおもしろいワケ”，講談社，東京，2008.
6） Jardin zoologique（リヨン動物園公式HP），http://www.zoo.lyon.fr/zoo/

# The Style of Animal Exhibition in French Zoos

Fumio, KAJIURA
*Dept. of Comparative Animal Science,*
*College of Life Science,*
*Kurashiki University of Science and the Arts,*
*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505. Japan*
( Received October1, 2010 )

The oldest zoo in the world which is opened to public people is the menagerie of "Le Jardin des Plants de Paris." It was established and opened in 1793, 4 years later the French Revolution. In the history of zoo, the zoological gardens of France are occupying very important positions in the world.

In 2010, the author went to survey the styles of animals Exhibition in French zoos. I surveyed the menagerie of "Le Jardin des Plants de Paris", Lyon zoo (Le Parc Zoologique de la Tête D'or) and the wild animals park of Thoiry. The menagerie of Paris has an old and traditional style of animal exhibition. On the other hand, the zoo of Lyon has a new style of exhibition because it has just been renewed in 2006. This paper discusses mainly the new style of animal exhibition in Lyon zoo.